

40年間を回顧して

鐘木 政 岐*

私は大正12年(1923年)4月東京帝国大学理学部天文学科に入学し、大正15年(1926年)3月卒業後直ちに4月より東京天文台に就職した。その後昭和10年(1935年)4月理学部天文学教室に移ったが、本年(1963年)3月末定年退職することになった。したがって学生時代の3年間を含めて今日まで40年間天文学界に身を投じていたわけである。

私の学生時代には理学部は課目制度であったので、大学の1年・2年・3年をそれぞれ前期・中期・後期とよんでいた。また理学部の各教室は本郷構内の弥生門付近に集まっていたが、天文学教室だけは麻布飯倉の旧東京天文台の所にあつた。しかし前期で修得すべき課目は物理学・数学などの講義と物理実験とが主で、唯一の天文関係の課目は球面天文学であった。この球面天文学も平山清次先生が毎週麻布から本郷へ講義にこられた。したがって私は平山先生からはじめて天文学の手ほどきを受けたわけである。中期・後期学生時代における天体力学・天体物理学などの講義や天文観測などは専ら麻布天文学教室で行なわれたのでこの2年間は本郷と麻布との間の往復運動が頻繁にくりかえされた。私が日本天文学会に入会したのは確か大正13年(1924年)で、これは当時暦計算及び日月食論の講義を担当しておられた福見尚文先生の紹介によるものと思う。もちろん、ずっと以前から日本天文学会のあることは知っていたが、学会というからには私などの若輩の入会できるところでないと考えていたからである。

後期のとき、私は卒業研究論文の題目として恒星天文学関係の問題を選んだ。いったい、恒星天文学は、W.ハーシェルによって明らかにされた太陽系の空間運動の発見(1783年)、及びいわゆる「ハーシェル宇宙」の研究(1785年)にはじまるものであるが、恒星の年周視差の測定や恒星の固有運動・視線速度の観測値の蓄積が遅れたために、その後100年間ほとんど発展しなかった。ようやく発展の緒についたのは今世紀になってからで、カプタインの二星流説(1904年)、シュワルツシルドの速度楕円体説(1907年)、エディントンの二星流定数決定法(1908年)、キャンベルの発見した恒星の視線速度に現われるK項(1911年)、シャリエーによる速度楕円体分布からの歪み(Skewness)と過剰(Excess)(1913年)などの研究が発表されるに及んで、とみに活況を呈してきた。このうちのシャリエーの研究を契機として、高速度星による恒星運動の非対称性の問題がアダムス、

コールシュツテル、B.ポッス、ジョイなどの研究によって注目され、特に1922年から1926年にかけてストレンベルグとオールドとの間に、恒星運動における非対称性に関して激しい論争が交えられた。すなわち、この論争の主な相違点をあげれば、ストレンベルグは、恒星運動における非対称性は一般的現象であつて、高速度星において最も著しく、漸次減少して低速度星にまで及ぶという見解をとるに対して、オールドは63km/秒以上の速度をもった高速度星にだけ現われる特異現象であるという見解をとつたのである。この論争がきっかけとなって、昭和2年(1927年)にオールド及びリンドブラッドによって銀河系の回転が明らかにされたわけである。私はこの時代に大学の学生生活を送つたので、平山信先生指導のもとに卒業論文として「[K型星の速度分布に就いて]」(英文)を作成して提出した。この論文は私にとっては処女論文であり、幸に平山信先生の好意により東京帝国大学理学部紀要の一篇として出版してもらつた。

前に述べたように私は大正15年3月卒業して、4月から東京天文台に就職し、橋元昌突先生の主宰する子午線観測室に勤務することとなった。子午線観測室というのは、子午儀、天頂儀、子午環などの観測器械を使って天体の子午線観測を行なうほかに、観測によって決定された精密時刻を無線及び有線電信を通じて報時業務を行なうことが主な仕事であつた。どんなわけか知らないが、当時天文台内では子午線観測室のことをタイム部屋とよんでいた。私もタイム部屋の一員として、天頂儀による緯度の継続観測をやるように命ぜられ、最初の間はその観測準備に専念した。また、天文学会の編集係から頼まれて、卒業論文としてまとめた「[K型星の速度分布に就いて]」の論説を天文月報第19巻10号、11号(大正15年)に執筆した。

私どもの時代には、数え年21才に達すると日本の男子はだれでも徴兵検査を受けなければならなかつた。私は甲種合格だらつたので、在学中は毎年入営延期願を提出してきた。そんな関係で、大正15年12月1日に金沢の山砲兵第9聯隊に1年志願兵として入営した。その年の12月25日に大正天皇が崩御され、年号も大正から昭和へと改められた。私は大正15年の大学卒業であるが、大正15年は昭和元年でもあるので、冗談に昭和年代の卒業に化けることもある。私たちが後期学生になった時期に、はじめて現役将校による学校軍事教育がはじめられた。私たちは暑中休暇のはじめに10日間軍事教練を受けたおかげで、普通には1年4カ月(1年志願兵

* 東大理学部

として1年、見習士官として4カ月)軍務に服すべきところを10カ月でよいことになり、昭和2年(1927年)9月30日に除隊することができた。

10月はじめには復職して東京天文台に帰り、中野三郎氏といっしょに緯度の継続観測の準備に着手し、同年12月から以後3年有余にわたり中野氏と交代で毎晩この観測を続行した。また、昭和3年4月から天文台に勤務するかたわら大学院に入学し、平山清次先生指導のもとに恒星天文学の研究を続けることになった。この間に天文月報第22巻1号~3号(昭和4年)に「恒星運動における非対称性に就いて」の論説を執筆した。

昭和4年4月天文学会定会において平山清次先生が理事長に、関口鯉吉先生は編集係主任に就任されることになった。それで、窪川一雄氏と私とは関口先生のもとで天文月報第22巻6月号から第24巻5月号までの編集のお手伝いをした。私はかねてより、日本天文学会がその定款に、本会は天文学の進歩及び普及をはかるを以て目的とすると唱いながら、学会にふさわしい行事のないことをひじょうに遺憾に思っていた。それは、我が国の天文同好者の中に研究者の数がきわめて少ないことに原因することではあったが、近年その数が逐次増加しつつあるので、天文月報には天文学の進歩的方面の紹介と通俗的方面の解説にあて、これとは別に研究的色彩の濃厚な学術雑誌を発行したいと考えていた。幸に平山理事長以下役員賛同を得て、天文月報第23巻1号(昭和5年)から毎号24頁(表紙4頁、本文20頁)として発行し、表紙には英国王立天文学会誌(MNRAS)にあやかり、それと同じ紫色を用いることにした。また従来本文は9ポイント活字、雑報は6号活字であったが、23巻から雑報欄を8ポイント活字に改めた。これは、6号活字では読みづらいという苦情を解消するためであった。このほか、これまで本文中で扱っていた学会会員の変光星の観測を付録として随時添付することにしたので、28頁のこともあった。したがって実質的には増頁したわけである。特に雑報欄を重視し、毎号4頁以上を外国論文の内容を抄訳してその紹介にあてるよう努めた。

一方、研究的色彩の学術雑誌として日本天文学会要報の刊行を企画し、これには邦文の研究論文・観測報告・専門的な総合報告などを掲載して天文学の進歩に貢献したいと考えていた。この方も賛同を得て、その準備にかり、昭和5年4月の評議員会で毎年1回(もしくは2回)要報を発行することを決定し、同年10月要報の創刊号(128頁)が刊行された。この刊行に力を得て、昭和6年5月頃までに第2号を発行すべく準備を進めた。その後は次期の編集掛の努力により、昭和6年6月に第2号(94頁)、昭和6年12月に第3号(78頁)というように、要報の発行が軌道にのったことは天文学会発展

のために悦ばしいことである。

昭和10年4月私は東京天文台から理学部天文学教室に転任した。ちょうどその4月の天文学会定会において平山信先生が理事長に就任され、その下で私は堀鎮夫、服部忠彦、奥田豊三の諸氏とともに再び編集をやらされることになった。編集の仕事で最も骨の折れるのは、数カ月さきざきの主要論説の計画をたててその執筆を依頼することである。この方は編集掛の前記三氏が献身的に働いて下さったので、順調に進捗した。ところが、昭和11年4月に関口鯉吉先生が東京天文台長に就任されてから暫くたって、天文月報をも含めて民間の科学雑誌などに天文台職員が原稿を執筆する場合には、事前に台長の諒解を得るべきだという見解を述べられた。このために従来有力な供給源であった天文台職員からの原稿が杜絶し、昭和11年の後半から同12年前半にかけて論説の原稿を集めるのにひじょうに苦労した。しかしながら幸いにして吉田正太郎(東北大学)、小岩井誠(柿岡地磁気観測所)、北岡竜海(気象台)、川畑幸夫(気象台)、鈴木敬信(当時科学博物館)、斎藤国治(東大大学院)、佐藤隆夫(同大学院)などの諸氏から原稿を頂いてどうにか切り抜けることができた。

昭和12年4月の天文学会定会において関口鯉吉先生が理事長に就任され、私は引続き向う2カ年間広瀬秀雄、奥田豊三、虎尾正久の諸氏とともに三たび編集をやらされることになった。はじめの間はまだ前のしこりが残っていたため天文台職員諸氏から論説原稿を頂くことができなかつた。したがって副理事長萩原先生、編集係の奥田豊三氏のほか前記の佐藤隆夫、小岩井誠、鈴木敬信の諸氏から論説原稿を頂いて毎月の天文月報を発行することができた。

昭和5年に創刊号を発行した日本天文学会要報はその後順調に進捗して巻を重ねてきたが、東京天文台報が刊行されて以来要報の発行は杜絶えがちになっていた。関口先生はかねてより、とかくマンネリズムに陥っていたきらいのある天文月報の内容や体裁などについて改革意見をもっておられた。ひとたび理事長に就任されるや、その改革意見を役員会及び評議員会に計り、その賛同を得て、右縦書きであった天文月報の体裁を、昭和13年1月発行の第31巻から左横書きに改め、またその内容も原著、総合報告、論叢、抄録および資料などの様式に改められた。理事長自らこのように熱意を示されたので、原稿の集まりはひじょうに順調に運び、その後私どもは大した苦労もなく任期終了まで編集をやることができた。

このように、私は昭和4年4月から昭和6年4月までと昭和10年4月から昭和14年4月までとの6カ年役員として直接学会の業務に関係したが、そのいずれも編

集ばかりであった。昭和 19 年 4 月以来今日まで評議員会の一員として関係してきたが、この間昭和 26 年 5 月より 2 カ年間萩原理事長のもとで副理事長を勤め、さらに昭和 30 年 5 月から 2 カ年間理事長として直接学会の業務に関係した。しかし関係したといっても実際の業務は若い理事の方々が献身的に働いて下さったので、私など添えものに過ぎなかった。昭和 24 年萩原理事長時代に欧文報告第 1 巻を発行されて今日まで巻を重ねているが、ここにおいて日本天文学会は名実とも天文学の代表的学会となったことは誠に悦びに堪えぬところである。

最後に、私の関係してきた恒星天文学についてふれておこう。世界における恒星天文学発達の歴史については、本誌第 47 巻第 12 号(昭和 29 年 12 月号)に掲載されている拙文【恒星天文学の足跡をたずねる】を参照して戴くことにして、日本における恒星天文学の先駆者は故平山信先生であって、先生は 1920 年頃から恒星天文学関係の内容を講義の一部にとりいれられ、また恒星天文学に関する論文を数篇発表された。私が恒星天文

学に興味をもったのも平山信先生の感化とその指導を受けたことによる。その後、清水疆氏(現京大教授)も恒星天文学に興味をもち研究を続けられた。今から 10 年ほど前から、若い人たちの中にも恒星天文学に関心をもつ方が多数現われたので、昭和 31 年に恒星天文学研究グループ(略称 SAM)を結成し、毎月 1~2 回会合を開いて研究問題を討議してきた。今日では、SAM のメンバーとして東北大学、東京大学、東京天文台、東京学芸大学、水路部、国土地理院、岐阜医科大学、京都大学、仏教大学、大阪学芸大学、和歌山大学、広島大学などの同好の士がこれに加わり、総数 30 名を超える状態となった。地理的にメンバーが日本中の各地に分散しているの、平常は東京および京都を中心としてそれぞれ毎月 1~2 回研究会をもつが、昭和 36 年夏と昭和 37 年夏には新潟県池の平で全体としての研究会をもった。こうして若い人たちの間に恒星天文学の研究熱が高まり、着々成果を挙げていることは私にとって誠に嬉しいことである。

会員諸氏の太陽黒点観測報告 (1962 VII~XII)

観測者	観測地	使用機械・方法	報告日数及び相対数											
			7 月		8 月		9 月		10 月		11 月		12 月	
			日数	相対数	日数	相対数	日数	相対数	日数	相対数	日数	相対数	日数	相対数
川口市立・児童文化センター 橋 伸太郎	埼玉・川口市	150 RE×56 P	7	21	16	27	12	76	8	54	—	—	8	41
			19	19	26	18	23	54	18	44	18	25	—	—
墨田川高・天文部	東京・墨田区	250 L P	8	8	15	5	—	—	10	31	10	15	13	20
大森高・“星を観る会”	東京・大田区	75 R { ×48 V ×48 P }	12	22	15	26	10	51	12	52	8	33	17	27
立川高・天文気象部	東京・立川市	100RE { ×60 P ×120 P }	17	36	26	32	21	79	12	56	16	26	19	35
慶応義塾高・地学研究会	神奈川・横浜市	不 明	—	—	4	41	5	37	4	25	2	25	—	—
日大高・物理部天文班	神奈川・横浜市	60 R { ×36 V ×100 P }	11	16	14	18	15	58	14	57	12	31	25	27
望 月 脱 育	埼玉・越谷市	75 RE×50 { V P }	19	27	24	26	25	64	21	51	22	27	28	31
武 石 信 之	東京・久留米町	50R×60×88 60R×50×100 P	14	24	21	29	21	51	14	51	14	32	25	29
清陵高・天文気象部	長野・諏訪市	100 R×60 P	15	24	20	19	21	45	14	47	14	18	24	20
藤 森 賢 一	長野・諏訪市	100 L { ×56 V 60 R }	16	22	28	24	19	53	15	43	15	29	21	28
飯 田 高・天文班	長野・飯田市	150 RE { ×56 V ×25 P }	—	—	—	—	16	68	18	52	11	12	—	—
三五教・月光天文台	静岡・沼津市	不 明	28	16	31	18	29	52	—	—	—	—	—	—
山 田 和	富山・礪波市	60 RE { ×36 V ×72 P }	17	22	26	30	10	78	7	87	1	22	1	16
出 口 修 至	愛知・知多町	150 L { ×21 V ×102 P }	9	24	16	20	17	53	10	43	11	29	15	32
鈴 木 美 好	三重・鈴鹿市	80 RE { ×40 V ×70 P }	3	17	22	26	9	70	11	54	12	42	20	39
橋本高・天文気象部	和歌山・橋本市	51 R P	9	14	17	20	18	44	11	38	10	27	12	—
藤 村 俊 夫	京都・左京区	不 明	11	15	13	22	15	35	19	38	12	24	15	17
水 野 晶	京都・宇治市	60 L×50 V	8	16	—	—	10	64	—	—	—	—	—	—
柏原高・天文班	兵庫・氷上郡	100RE { ×60 P ×120 P }	21	28	21	29	18	63	16	49	12	25	13	29
姫路高・天文班	兵庫・姫路市	50 R×60 P	10	14	25	13	10	36	13	38	13	20	15	21
玉 川 中 学 校	長野・茅野市	60 E×48 V	15	16	20	17	17	40	16	47	14	22	13	13

・使用器械方法の欄の略符は最初の数字が口径(耗), 以下 R (屈折), L (反射), E (赤道儀), A (経緯台), × (倍率), V (直視), P (投影) を示す。報告日数および相対数の欄で“—”は報告のなかったものを示し、相対数は(10₀+f)の月平均値である。